

## 第六話 「感触」

本といえますと、「電子書籍」もずい分と身近になってきましたね。場所を取らず、リンクにも飛べるし、検索もできる。便利になったものです。ただ、本の中には「電子化」してしまいたくない本もあります。その「装」の感じが素敵だとか、紙の質感がいいとか、本棚に置くと絵になるとか。「モノ」としての魅力を持った本。現在制作中の2冊もそうした本にしたいなと思っています。

ただ、「モノ」の魅力とは、いい素材を使えばいいとかそういうことだけでなくでもないですね。より大事にしたいのは、作っている人の「存在」がそこに感じられるかどうか。機械を通してスイッチポンではなく、印刷の工程でも、製本の工程でも、そこでどれだけ人が一生懸命の汗をかいたか。その感触こそが、ときに人を鼓舞し、癒しもするのではないか。

それってノスタルジーでしょうか。

いや、そんなことはないはずと、クルミドコーヒー四年間の営業をかけて、僕はそのことを信じています。

(影山知明)

